

# 『Fonte』 ナラティブの特徴

## ーテキストマイニングによる不登校スティグマの分析ー

和光大学大学院 久木田隼

### はじめに

『Fonte』とは、不登校についての情報と当事者の声を発信する新聞メディアである。本紙は親の会の全国ネット関係者らが中心となり、1998年『不登校新聞』の名称で創刊され、その後2004年に『Fonte』に改称した。創刊以来、全国紙として月2回発行されている。本研究では、『Fonte』の記事を対象とし、不登校者<sup>注1)</sup>とその親のナラティブを分析する。

### 目的

不登校者やその家族の多くは、不登校という烙印（スティグマ<sup>注2)</sup>）を押されることで、程度の差はあれ自己否定、自尊心の低下といった感情を経験している<sup>注3)</sup>。

本研究では、『Fonte』に掲載された不登校者とその親の手記やインタビューなどの記事を、当事者のナラティブ（語り）とみなしテキストマイニングする。これによって、不登校に伴う生きづらさが、どのような周囲との関係性で形成されているのかを考察する。

### 方法

#### 1 分析対象

『不登校新聞』から『Fonte』に改称した2004年6月15日（通算148号）から2011年1月1日（通算305号）までの計157号分の新聞を収集した。手記やインタビューなど不登校者とその親のナラティブを内容とする記事、計439件を選び出した。

#### 2 分析の手順

記事の電子テキストデータを **Text Mining Studio** で読み込んだ。記事における語り手は、不登校者が144記事（男性82、女性59、性別不明3）、その親が295記事（父51、母229、性別不明15）であった。次に、**Text Mining Studio** のグルーピング機能を用いて、同一グループとして扱いたい単語を指定した。ここでは、先生や校長といった単語を「学校関係者」グループに、テレビやラジオといった単語を「マスメディア」グループに、息子や娘といった単語を「わが子」グループに集約した。「子ども」「子どもたち」といった単語は、

注1) 「現在不登校している者」と、「過去に不登校経験がある者」両者を「不登校者」と表記した。

注2) Goffman(1963)はスティグマを「人の信頼／面目を失わせる (discredit) 属性」、「社会によって完全に受け入れられる資格を与えられない者の状況」と定義している。スティグマを付与された人は、尊厳を奪われ、恥の意識に苛まれ、自己否定的な感情を形成していく。

注3) 増田ら(2007)は思春期における不登校経験がセルフエスティームに与える影響を研究した。増田らの研究で、女子の不登校経験者はセルフエスティームが非不登校経験者よりも有意に低い結果を示した。松本(2003; 2005)は親の会に参加する母親、父親にインタビュー調査を行い、不登校児の母親は孤立感を、父親は自己否定感を経験することを指摘している。

「わが子」を意味するか、一般的な概念としての「子ども」を意味するか、原文を読んで筆者が判断し、語り手自身の子について語っていると判断したケースのみ「わが子」に振り分けた。よって、「子ども」という単語は、本研究においては、わが子を意味せず、一般的な子どもか、もしくは他人の子を意味する。

本研究では全データ（439 記事）の分析と並行して、語り手ごとのナラティブの分析を行う。語り手は、「不登校者（男女込み）」、「母親」、「父親」の3属性に分類した。<sup>注4)</sup>

テキストマイニングを用いた分析は以下の手順で実施した。1) 全データと、語り手ごとのデータの基本統計量の算出、2) 全データと語り手ごとの、単語の出現する記事数を集計し、順位づけを行う単語頻度解析、3) 特定の単語を指定し、その単語にみられる係り受け関係を、語り手ごとに抽出する注目語情報分析、4) 語り手と関連が深い単語を、数値として導き出す特徴語分析、5) 語り手と関連の深い単語を視覚的に明らかにする対応バブル分析。

## 結果

### 1 基本統計量

はじめに『Fonte』の439記事テキストから得られた基本情報と、語り手ごとの基本情報を Table 1 に示す。全439記事のテキストの平均文字数は458.5字、総文数（センテンス数）は10,082文、平均文長は20字、延べ単語数は75972個、単語種別数は13315個であった。タイプ・トークン比（金, 2009）は、0.175であり、比較的低い数値であることから、記事で共通に用いられる単語が多いことを表している。

語り手ごとの記事数を比較すると、「母親」を語り手とする記事が229件（全記事のうち52%）と圧倒的に多く、次いで男女込みのデータである「不登校者」記事が144件（33%）、「父親」記事が最も少なく51件（12%）であった。

Table 1 全データと語り手ごとの基本情報

	全データ	不登校者	母親	父親
総行数(記事数)	439	144	229	51
平均行長(文字数)	458.5	504.4	441.9	471.4
総文数	10082	3998	4918	1033
平均文長(文字数)	20	18.2	20.6	23.3
延べ単語数	75972	27676	38161	8849
単語種別数	13315	6435	8363	3809
タイプ・トークン比	0.175	0.233	0.220	0.431

<sup>注4)</sup> 性別が特定出来なかった「親」の記事（15件）は、語り手ごとの分析からは除外した。

## 2 単語頻度解析（記事数）

単語の出現する記事数を集計し、順位づけを行う単語頻度解析を行った。全データと、語り手ごと（不登校者、母親、父親）の単語出現記事数を Table 2 に示す。全データでは「学校」が最頻出単語で 297 記事あり、続いて「不登校」が 263 記事であった。また 3 者の語り手、すべてで「不登校」「学校」の出現記事数が多かった。不登校者、母親、父親が「学校」「不登校」と強い関わりがあることがわかった。その他に、3 者に共通して、用いられる単語として、「今」「自分」「人」「親」があった。

Table 2 全データと語り手ごとの単語頻度ランキング上位 20（記事数）

順位	全データ(n=439)		不登校者(n=144)		母親(n=229)		父親(n=51)	
	単語	頻度	単語	頻度	単語	頻度	単語	頻度
1	学校	297	学校	108	わが子	153	不登校	34
2	不登校	263	今	101	学校	148	学校	33
3	今	251	自分	97	不登校	143	子ども	29
4	自分	246	人	96	今	127	わが子	26
5	人	218	不登校	79	自分	127	親	19
6	いる	198	行く	78	子ども	112	良い	19
7	わが子	198	いる	77	人	106	学校関係者	18
8	子ども	189	思う	70	いる	102	今	18
9	親	184	行く+ない	68	親	101	自分	18
10	良い	183	通う	65	思う	98	話	17
11	思う	180	言う	63	良い	97	マスメディア	14
12	行く	173	良い	62	言う	87	まったく	14
13	言う	168	家	60	考える	76	心	13
14	考える	154	考える	58	行く	75	家族	12
15	行く+ない	152	凄い	56	話	74	そう	11
16	話	139	笑	55	見る	72	とても	11
17	見る	136	親	55	気持ち	71	人	11
18	家	133	気持ち	51	行く+ない	69	問題	11
19	気持ち	132	やる	50	学校関係者	67	いっしょ	10
20	学校関係者	129	感じる	49	子どもたち	66	親の会	10

次に、語り手ごとに単語の出現記事数をみる。不登校者に着目すると、「自分」が 97 記事（不登校者を語り手とする記事中 67%）あった。「母親」記事では、「わが子」が最多（153 記事）で、母親を語り手とする記事中 67% で用いられている。父親記事では、一般的な「子ども」が 29 記事（父親を語り手とする記事中 57%）、「わが子」が 26 記事で用いられていた。

次の注目語情報分析では、3 者の語り手が共通して多く用いた「自分」という単語について分析する。「自分」を注目語とすることで、不登校を経験した語り手が「自分」をどのような言葉で語るかを分析したい。

### 3 注目語情報分析（記事数）

本研究では、注目語として「自分」を指定した。「自分」という単語が、語り手ごとに、どのような単語と係り受け関係にあるかを分析する。

不登校者記事における「自分」の係り受け分析結果を Figure 1 に示した。横軸の数値は係り受け関係にある単語の出現記事数を表している。不登校者の記事では、「自分-人生」が最多で8記事であった (Figure 1)。また、「自分-イヤ」「自分-きらい」「自分-情けない」「自分-悪い」といった自己否定、自己評価の低下を表す係り受け表現が目立った。不登校者が、不登校になったこと、学校での出来事などにより自己否定的な感情を経験していることが分かった。「自分」に関する係り受け表現上位 20 件を、原文参照したところ、「自分」という単語は、全てのケースで不登校者自身を指して用いられていた。

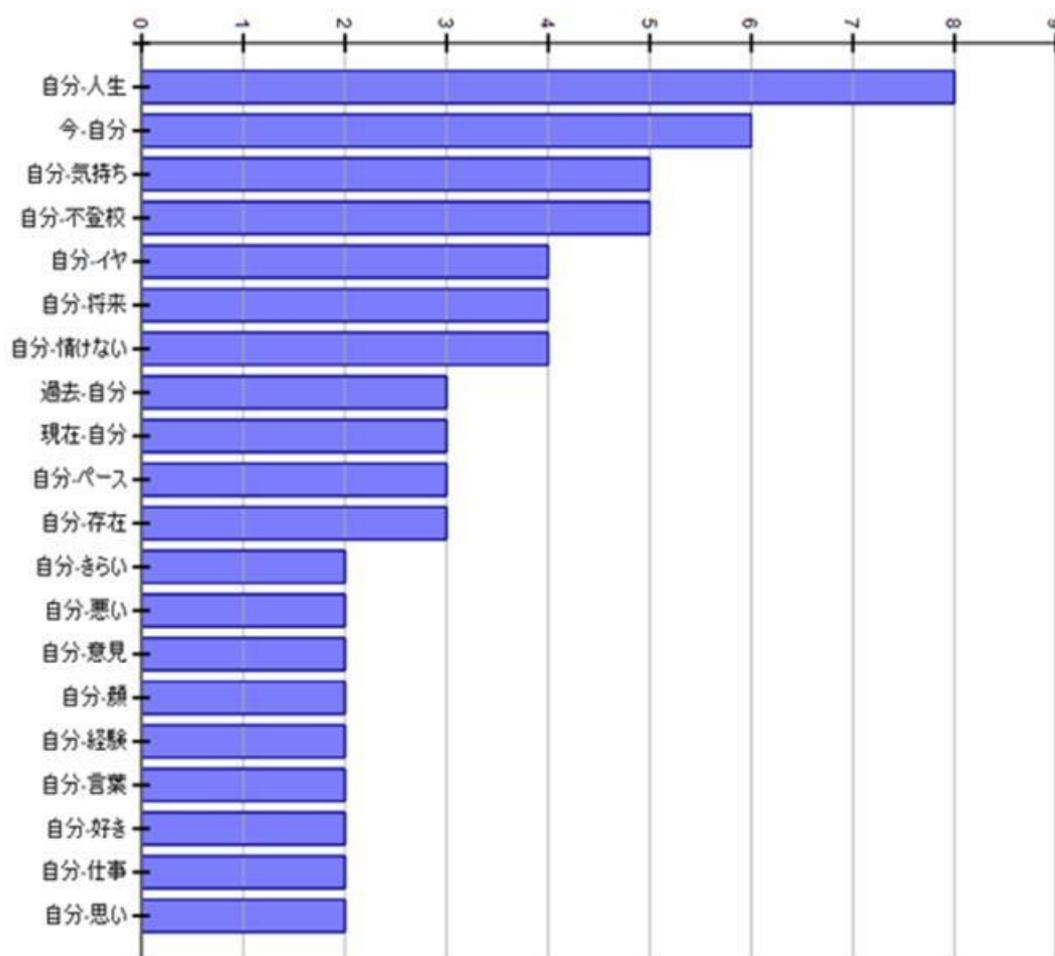


Figure 1 注目語情報分析 不登校者記事における「自分」の係り受け頻度（記事数）

Figure 2には、母親記事における「自分」の係り受け分析の結果を示した。「自分－気持ち」が最多で12記事、「自分－わが子」の係り受け表現が9記事で用いられていた。母親記事で「自分」という言葉が、どういった文脈で使われているか調べるため、原文を参照したところ、「自分」が母親自身を意味するケースと、わが子を意味するケース、他者を意味するケースとあることが分かった。原文の一部をTable 3に示す。

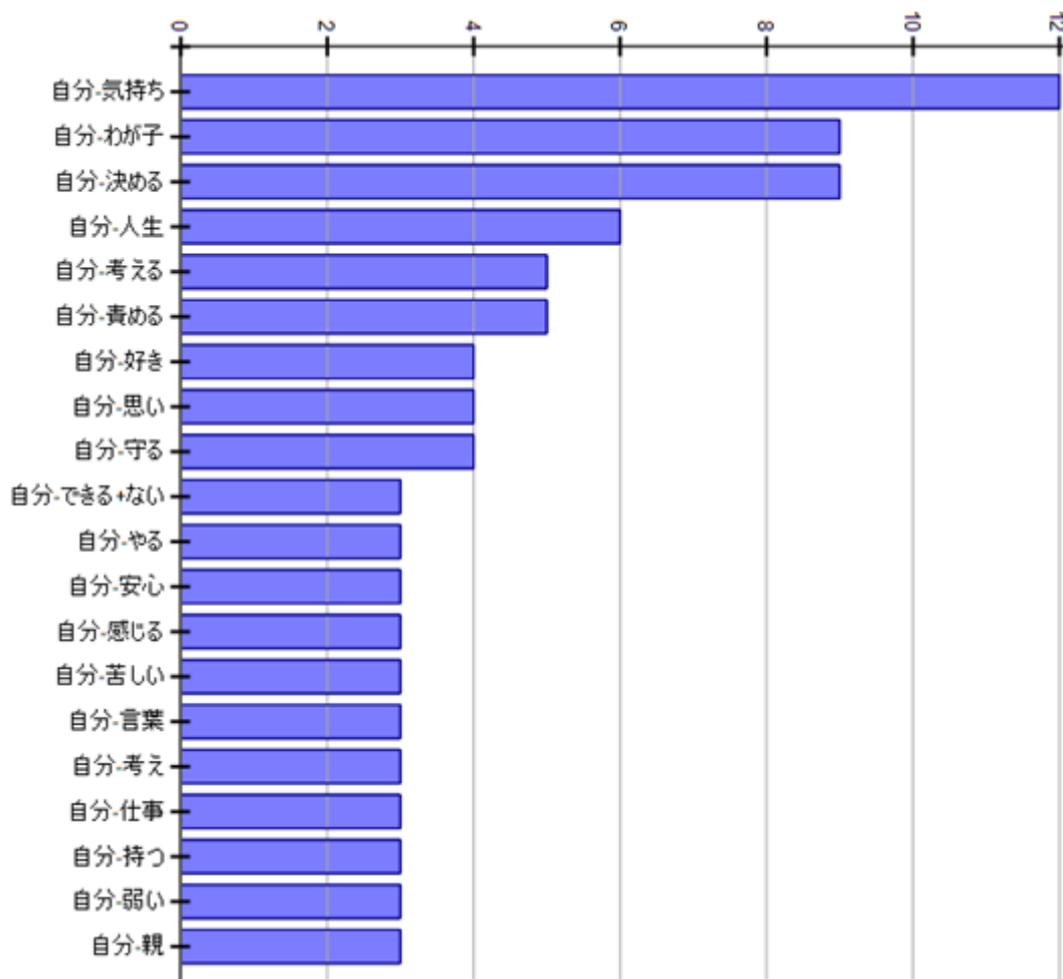


Figure 2 注目語情報分析 母親記事における「自分」の係り受け頻度（記事数）

Table 3 母親記事の原文抜粋

「自分」が指す対象	原文の一部抜粋	記事号数
母親自身	「・・・ <b>自分</b> の気持ちにじっくりくる今の親の会に落ち着くことになった。・・・」	180号
わが子	「・・・長男は <b>自分</b> で決めたことをやり遂げて・・・」	158号
他者	「・・・いろんな親の方が <b>自分</b> の正直な気持ちを語っていて・・・」	162号

また、「自分－責める」は5記事であったが (Figure 2)、原文参照したところ、母親が「自

分」(母親自身)を責めるケースが 3 記事、自分の子どもが「自分」(子ども自身)を責めるケースが 2 記事あった。不登校を通して不登校者だけでなく、母親も自己否定的な感情を経験していることが分かる。

次に、父親記事における「自分」の注目語の分析結果を Figure 3 に示した。「自分-責める」の係り受け表現が最多で 5 記事であった。原文参照したところ、不登校をしたわが子が、「自分」(わが子自身)を責めるケースが 4 記事、学校の教員が、「自分」(教員自身)が正しいと確信して、不登校者や家族を責めるというケースが 1 記事あった。

「自分」という単語は、Table 2 に示したように、不登校者、母親、父親三者に共通して用いられる言葉ではあるが、不登校者が語り手の場合には、自分自身を指し示す意味で用いられているのに対して、母親と父親は、わが子や他者を指し示す際にも、用いていることが分かった。

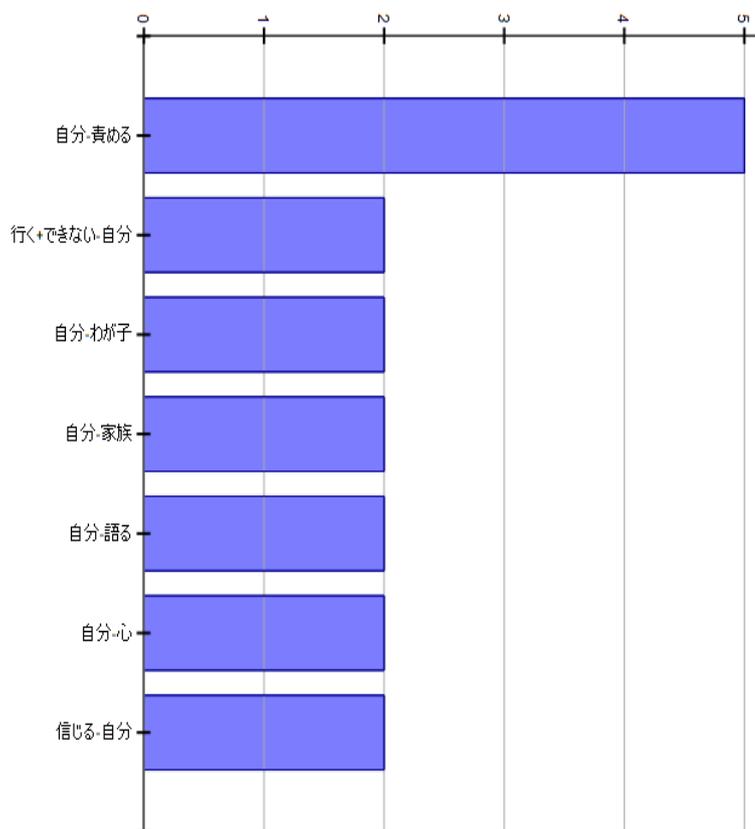


Figure 3 注目語情報分析 父親記事における「自分」の係り受け頻度 (記事数)

#### 4 特徴語分析（単語出現回数）

語り手ごとの特徴的な言葉の表現や、言葉の使い方を分析するため特徴語分析を行った。Table 4 に語り手ごとの特徴語上位 20 件を示した。本研究では特徴語の抽出指標として、補完類似度を用いた。特徴語分析では、頻度を「記事数」ではなく、単語の「出現回数」に設定した。属性頻度とは、語り手ごとの単語出現回数、全体頻度とは、不登校者、母親、父親の 3 者の単語出現回数を足した数値である。

Table 4 語り手ごとの特徴語（上位 20 語） 単語出現回数

不登校者			母親			父親		
単語	属性頻度	全体頻度	単語	属性頻度	全体頻度	単語	属性頻度	全体頻度
自分	432	853	わが子	1086	1313	わが子	207	1313
人	284	555	子ども	321	514	子ども	85	514
(笑)	135	166	親の会	132	159	妻	21	26
行く	193	356	わが子たち	84	90	教育	27	80
今	242	519	親	263	439	父親	26	77
通う	118	193	夫	79	81	マスメディア	25	72
凄い	95	137	わが家	82	96	家内	18	18
好き	72	98	子	117	175	不登校	96	683
働く	66	89	学校関係者	193	325	権利	15	36
仕事	76	125	子どもたち	96	139	家族	23	106
高校	80	140	話	145	235	家庭	16	60
楽しい	81	143	気持ち	137	230	生き方	14	45
家	115	237	わかる	60	85	大切	18	82
勉強	65	107	お母さん	42	50	気分	11	25
考える	123	267	良い	176	311	位置	9	11
ひきこもる	72	128	心配	45	56	競争	9	14
大学	48	65	家庭内	35	37	データ	8	9
イヤ	38	51	参加	61	88	つく	12	45
母	52	92	学校	515	972	散歩	8	13
行く+ない	114	262	聞く	97	159	制度	8	13

不登校者記事の特徴語 1 位は「自分」であった。「自分」という単語は、不登校者だけで 432 回（全体頻度の 51%）も使われている。不登校者は自身への関心が強く、自身のあり方や、自身の経験についてのナラティブが多いことが分かる。

母親記事に、特徴的であった単語は「わが子」や「わが子たち」などであり、自身の子に関する単語が特徴語として上位にランクした。「わが子」の不登校経験を代弁するもの、「わが子」と母親自身との関係性に関するナラティブが多いことが分かる。

父親の特徴語には、「教育」「権利」「制度」といった抽象的な概念を表す言葉が多い。父親は、不登校を、不登校者や母親と比較して、教育や制度といった社会的な観点から語っているナラティブが多いことが分かる。

## 5 対応バブル分析

次に、記事で用いられている単語と語り手との関係を視覚的に明らかにするために対応バブル分析を行った (Figure. 4)。

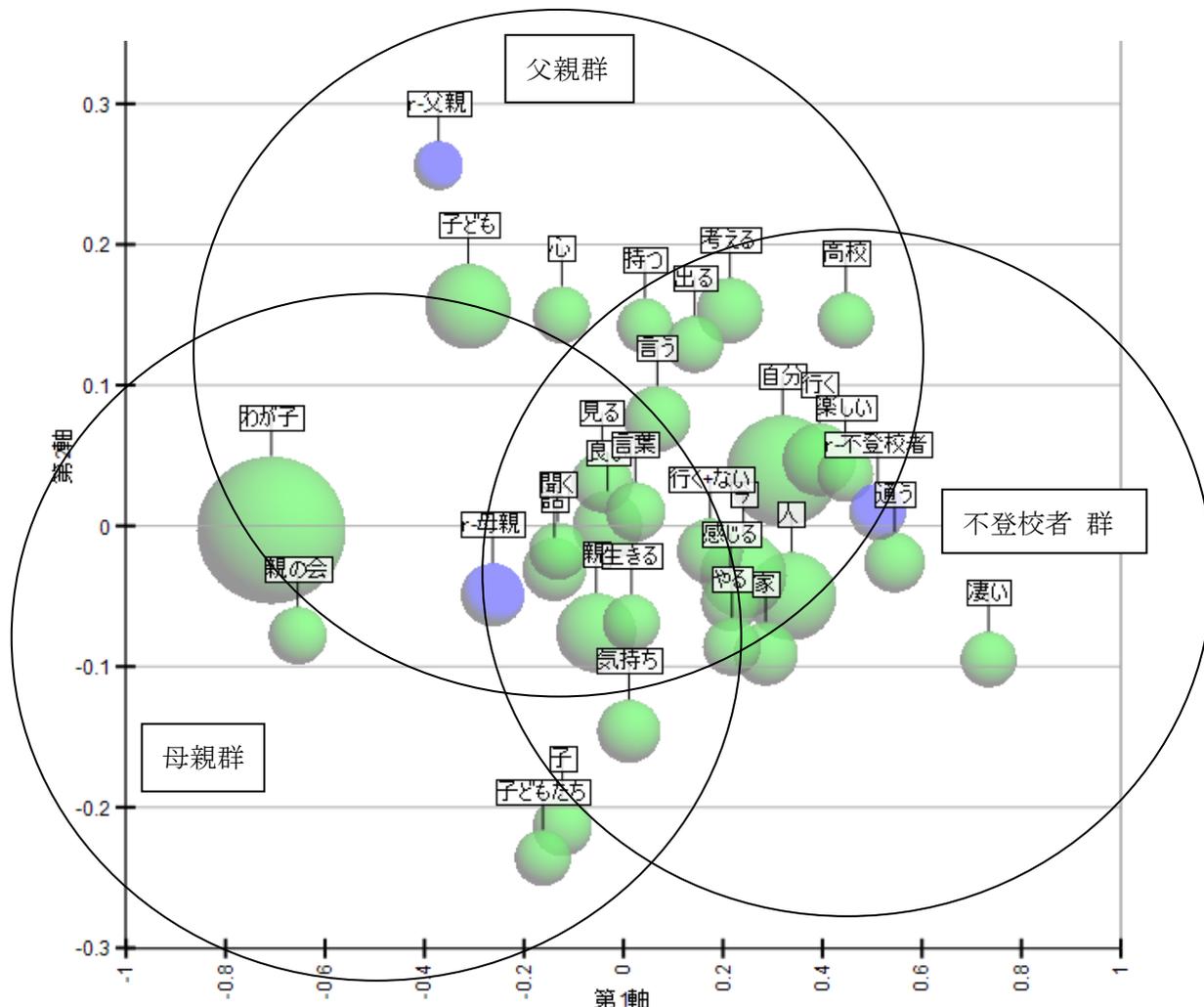


Figure 4 語り手と言葉の関係についての対応バブル分析

Figure 4 をみると、不登校者群には「高校」「通う」「行く+ない」といった単語が、近接しており、学校への登校、不登校に関わる単語との関連が深いことが読み取れる。

母親群には、「わが子」「親の会」「聞く」といった言葉と深い関連があることが明らかになった。本研究で抽出した記事の内、親の会の世話人へのインタビュー記事が、筆者が確認できた限りで 4 記事あったが、語り手は全て不登校者の「母親」であった。母親は、父親と比較して、「親の会」への関わりが深いと考えられる。

父親は、一般的な「子ども」という単語と関連があることがわかった。

## 考察

### (1) Fonte 記事の全体的な特徴

本研究における単語頻度解析の結果、不登校者、母親、父親の3者の語り手が、「不登校」「学校」という共通の単語を用いていることが明らかとなった。『Fonte』紙上においては、「不登校」経験と「学校」が、語り手自身について語る上で、必要不可欠な言葉であることが分かった。不登校者とその家族は、学校に行っていない状況においても「学校」の存在に大きくとらわれていることが明らかとなった。

### (2) 語り手ごとの特徴

本研究では、注目語情報分析、特徴語分析、対応バブル分析を通して、語り手ごとのナラティブの特徴を明らかにしてきた。

不登校者は、特徴語分析からも明らかなように、「自分」自身についてのナラティブが多い。注目語分析の結果「自分ーイヤ」「自分ー情けない」といった、自己否定的な感情を経験していることが分かった。また、対応バブル分析を通して、「高校」「通う」「行く＋ない」といった学校への登校、不登校に関わる単語との関連の深いことが明らかになった。不登校によって学校との直接的な関係は薄くなっているが、学校への意識・関心は非常に高いことが分かった。

母親は、特徴語分析から不登校をしている「わが子」に関心が集中していることが分かる。わが子との距離の近さや、直接的な関係性が見て取れる。一方父親は、『Fonte』紙上においては、ナラティブそのものが少ない。父親は、一般的な「子ども」を語るが多く、わが子の不登校経験を社会との関係性においてとらえる傾向があることが分かった。

「自分」という単語は、不登校者、母親、父親三者に共通して頻出する言葉である。しかし、「自分」を注目語で分析したところ、語り手ごとに指し示す対象が異なることが明らかになった。不登校者が語り手の場合には、自分自身を指し示す意味で用いられているのに対して、母親と父親は、わが子や他者を指し示す際にも、用いていることが分かった。

### (3) 本研究の限界と今後の課題。

本研究で分析しきれなかったこととして、注目語情報分析がある。注目語としては、「今」「学校関係者」「マスメディア」「Fonte」「フリースクール」「親の会」「居場所」などを考えており、今後さらに深く考察をしていきたい。

## 参考文献

- 朝倉景樹 1995 登校拒否のエスノグラフィー 彩流社
- 『Fonte』通算 148号 (2004年6月15日) ～ 通算 305号 (2011年1月1日)
- Fonte <<http://www.futoko.org/>> (2011年11月6日アクセス)
- Goffman, E. 1963 Stigma: Notes on the management of spoiled identity. New York: Simon and Schuster, Inc. (ゴッフマン E. 石黒毅 訳 2001 スティグマの社会学 ―烙印を押されたアイデンティティ― せりか書房)
- 飯田敏晴・伊藤武彦 2008 心理学的概念として stigma を扱うことは可能か? 日本応用心理学会第 75 回大会 ワークショップ 「スティグマ・偏見・差別とは?」
- 加藤美穂 2002 新聞家庭面における不登校言説 育児知識・言説に関する実証的研究 58-70.
- 金明哲 2009 テキストデータの統計科学入門 (第 1 版) 岩波書店
- 小平朋江 伊藤武彦 松上伸丈 他 2007 テキストマイニングによるビデオ教材の分析 ―精神障害者への偏見低減教育のアカウントビリティ向上をめざして― マクロカウンセリング研究. 6, 16-31.
- 小平朋江 いたうたけひこ 2010 「当事者が主人公」の実践のあり方を考える ―統合失調症当事者によるナラティブを手がかりに― 和光大学総合文化研究所年報『東西南北』2011. 130-140.
- 久木田隼 2010 偏見について ―精神疾患スティグマ研究から見たべてるの家の実践― 未発表
- 工藤宏司 2006 「不登校」現象とスティグマ ―『不登校新聞』記事タイトル・データベース解題にかえて― 中河伸俊編 スティグマの相互行為的マネジメントと文化的構成の研究 平成 16 年度～17 年度 科学研究費補助金 基盤研究 (C) 成果報告書, 82-91.
- 増田明美 塚本康子 2007 思春期における不登校経験がセルフエスティームに与える影響 ―発達段階別にみた不登校経験者と非不登校経験者との比較― 母性衛生 47(4), 607-615.
- 松本訓枝 2003 母親が語る「不登校」問題と対処-「親の会」における学習と相互作用過程 市大社会学 (4) :63-80.
- 松本訓枝 2005 父親が語る「不登校」問題-親の会に参加する父親を対象にして 市大社会学 (6), 29-44.
- 大高庸平 いたうたけひこ 小平朋江 2010 精神障害者の自助の心理教育プログラム「当事者研究」の構造と精神保健看護学への意義 ―「浦河べてるの家」のウェブサイト「当事者研究の部屋」の語りのテキストマイニングより― 日本精神保健看護学会誌, 19(2), 43-54.